

ベリーズ・ゴート、  
モラグ・ゴート 著、高月園子 訳

『5歳からの哲学  
考える力をぐんぐんのばす  
親子会話』

晶文社、2019年1月

224頁、1,600円（税別）

本書は、幼稚園児や小学生くらいの子どもに親や教師が哲学を教えるためのガイドブックである。著者は、スコットランドの大学の哲学教授と小学校の先生であり、哲学的な会話を通して子どもの思考力、集中力、そして議論する能力を伸ばすことできるという点が強調されている。まず冒頭の5ページほどで、哲学を子どもに教えることの利点や心構え、哲学的問答の方法などに関して簡潔に説明し、それ以降は、子どもに哲学を教える際に実際に教材として使うことができるストーリーと問答の例が掲載されている。ストーリーはまず、哲学を学んだことのない人でも日常生活の中でしばしば遭遇することになる身近な問題、例えばどうすれば公平と言えるのか、友だちとは何か、嘘をついてはいけないのかといった問題を取り扱い、その後、美学や認識論に関連する問題に進み、最後に「テセウスの船」といったいかにも「哲学」らしい問題が登場するという構成になっている。登場する問題に対しては、イエスとノーの立場の回答例がそれぞれいくつか挙げられ、適宜、その回答例に対する反論も挙げられ、さらに深い次元

へと問答が進むようになっている。また、取り扱われる問題についてより深く哲学的に考察してみたい人向けに、土屋陽介氏によるコラムが適宜掲載されており、これは原書にはない日本語版の優れた特徴となっている。

本書には随所に愛らしい動物のイラストなどが載せられており、文章のスタイル・配置に関してもストレスを感じることなく読むことができるように工夫されている。一言で言えば、とっつきやすい。また、子どもと哲学的問答をするといっても、実際にどのようにしたらよいのかイメージが湧かないという親も多いだろうが、本書はその点にも配慮してつくられており、「子どもはこのように答えるかもしれませんが。もし子どもがこのように答えたら、今度はこんな反論をしてみましよう」というふうに議論の筋道について丁寧にガイドしてくれる。この点については「少し丁寧過ぎるのではないか。哲学的問答はそのように型にはまったものではなくもっと自由に創造的なものではないか」と思われるかもしれないが、哲学に馴染みがない人にとっては、おそらく最初はこのくらい丁寧なガイドがあった方が安心できるのではないだろうか。まずはこのガイドを参考にして少しずつ慣らしていくのがよいだろう。そして哲学的問答に慣れてきたら、子ども自身に話したいテーマを決めてもらって自由に議論したり、あるいは「子どものための哲学」の意義や方法論に関してより深く知るために、おそらく考え方が近いマシュー・リップマンの著書などに手を出してみるのもよいだろう。

中村信隆（上智大学文学研究科）